

中学校国語科の古典学習における電子黒板の活用 －「竹取物語絵巻」を読み解くために－

井上 泰

教科書に掲載されている絵画テキストや掲載されていない絵画テキスト、それらを用いて古典学習を拡充させることができる。しかし、実際の授業では、絵画テキストを十分に分析できるように学習者に提示するのは難しい。プリントで資料を作ったり、書画カメラやプロジェクターで絵画テキストを映し出したりしても、拡大したり絵画テキストに書き込みをしながら説明することができない。絵画テキストを読む活動を充実させるためには、提示方法の工夫が必要である。その工夫の一つとして、電子黒板があるだろう。本稿では、電子黒板を活用して「竹取物語絵巻」を読み解いた活動を報告することで、電子黒板が絵画テキストを読む活動において有効であることを示したい。

1. はじめに

稿者はこれまで、中学校国語科における古典学習の拡充に向けて、教科書に掲載されている絵画テキストや掲載されていない絵画テキストの活用を提案し、実践してきた。活用の具体やその効果は別稿に譲るが、絵画テキストを活用することによって古典学習を拡充させることができると考えている¹⁾。しかし、その一方で活動をさらに充実させるためには、絵画テキストの提示方法を工夫する必要があると考えている。

絵画テキストを読むためには、まずは画面に何が描かれているのかを理解しなければならない。そして、『源氏物語』や『竹取物語』を描いた物語絵であれば、人物の「配置」や画面に引かれた「境界線²⁾」、また「几帳の立て方」や「紐のねじれ」、「草木のなびき」³⁾など微細なものにも目を遣り、注意深く画面を読み込んでいかなければならない。絵画テキストを読むには、このような視覚的な認識が必要であり、授業で一斉に読み進めるには、視覚的な認識をクラスで共有する必要がある。

授業において学習者に絵画テキストを提示する方法としては、個別にプリントを配布し同じものを黒板に貼り付けたり、書画カメラやプロジェクターを使って絵画テキストを映像として提示したりする方法がある。しかし、黒板に貼り付けたプリントや書画カメラの映像では、プリントや絵画テキストに直接書き込みをしながら説明はできるが、プリントやテレビモニターが小さくて学習者からは見えにくい。一方、プロジェクターは絵画テキストを大きく映し出すことができるが、直接ペンなどで書き込みができず説明がしにくい。いずれの方法も視覚的な認識をクラスで共有するには難点があると言える。そうした難点を解消できそうなのが、電子黒板である。本校には、株式会社内田洋行の「e－黒板」がある。「e－黒板」とは、「黒板上(またはボード上)にコンピュー

ターの画面を投映し、付属のペンや指で操作できる装置⁴⁾である。これであれば、絵画テキストを大きく提示することができるし、映像に専用のペンで書き込みをして説明していくことができる。また、画面の一部分を拡大することもでき、詳細に絵画テキストを読むことができる。本稿では、電子黒板を活用した活動の具体を報告することで、電子黒板が絵画テキストの提示方法として有効であることを示したい。

2. 活動の具体

本活動は、『竹取物語』を学習後、発展学習として行ったものである。『竹取物語』の学習は、次に示すように物語の「問いかけ」と「呼びかけ」とが分かるように①から⑨までの場面を原文から抜粋し読み進めた。

①かぐや姫の発見と成長

・翁の世欲を読み取る。

②五人の貴公子の求婚

・〈結婚〉をめぐる翁とかぐや姫の考えを読み取る。

・「色好み」を読み取る。

③かぐや姫の難題

・かぐや姫の難題に対する貴公子の対応とその結末の違いを読み取る。

④帝の求婚に応じないかぐや姫

・「帝の求婚」に対する翁とかぐや姫の考えの違いを読み取る。

⑤帝、狩りをよそおい翁邸へ行く

・「帝」に対するかぐや姫の反応とその反応を受けて変化した帝の態度を読み取る。

・帝とかぐや姫の交流のあり方を読み取る。

⑥かぐや姫の嘆き

・月を見て泣く理由を言わなかった訳を理解する。

・かぐや姫の翁と姫への気持ちをを読み取る。

- ・翁の取り乱す様を読み取る。
- ・天上の世界について理解する。

⑦月からの迎え

- ・かぐや姫が地上に降った理由を理解する。
- ・天上の人々の地上への考え方を理解する。

⑧かぐや姫の天昇

- ・かぐや姫と天人の地上に対する思いの違いを読み取る。
- ・かぐや姫の翁と姫、帝への配慮を読み取る。
- ・翁と姫の嘆く様を読み取る。

⑨残された帝と翁、姫

- ・不死の薬をめぐる翁と帝の考えを読み取る。

次に、絵画テキストを用いた活動の内容を示す。使用した絵画テキストは次の通り。なお各絵画テキストはそれぞれの所蔵先が公開しているHPを参照した⁵。

●龍谷大学図書館蔵『竹取物語』(以下、龍谷本)

かぐや姫が天昇する場面を使用した。画面右上に車に乗ったかぐや姫が配置され、画面左下には吹き抜け屋台に翁と姫が配置されている。また、翁と姫の横に頭中將が描かれ、背後には女房達が描かれている。かぐや姫の様子をよく見てみると、かぐや姫は「天の羽衣」を着ずに「唐衣・裳のまま葱花車に乗」⁶り、地上を見ている。この点は物語と異なっている。物語では、かぐや姫は「天の羽衣」を着て翁への「もの思ひ」を失い天昇していく。本図は、「もの思ひ」を失わず、地上への思いをもったまま天昇するかぐや姫を語り出している。

●国立国会図書館蔵『竹取物語』(以下、国立国会本)

かぐや姫が天昇する場面を使用した。本図も龍谷本と同じくかぐや姫は「天の羽衣」を着ず「唐衣・裳のまま葱花車に乗」っている。本図もまた「もの思ひ」を失わず、地上への思いをもったまま天昇するかぐや姫を語り出している。ただし、龍谷本と違いもある。画面右上には車に乗ったかぐや姫が配置されているが、その姫の前、画面中央には頭中將が配置され、天人から不死の薬と手紙を受け取ろうとしている。一方、翁と姫は画面左下の吹き抜け屋台に泣き伏した状態で配置されている。また、画面右下には戦う気持ちを失った兵士が描かれ、女房は描かれていない。人物の配置とモチーフの違いから、本図はかぐや姫と帝の別れを語り出していると言える。

●國學院大學図書館蔵『竹取物語絵巻』(武田祐吉博士旧蔵本。以下、國學院本)

かぐや姫が月を見て嘆き、それを翁や姫たちが心配をしている場面を使用した。画面右上には月が描かれ、画面左には翁の邸宅が描かれている。邸宅には、画面左上に几帳に囲まれたかぐや姫が配置され、その下方に翁や姫、女房が配置されている。かぐや姫は袖を顔にあて泣

いている様子。一方翁たちは月を見上げているのみで泣いている様子はない。以上の点から本図は、かぐや姫が月を見て嘆き、それを翁や姫たちが心配をしている場面を描いていると考えられる。また、本図は霞の配置に特徴がある。霞は、画面右上から左上にかけて描かれているが、その霞によって、月と翁たちを線で結びつけることができない。つまり、翁たちからは月が見えないのである。一方、かぐや姫は月とほぼ同じ高さに配置されているため霞はかからず、むしろ霞にそって月とかぐや姫が線で結ばれる。また霞によって生み出される線の延長線上に几帳が配置され、より月とかぐや姫とを結ぶ線が強調されている。霞によって生み出される線と線の断絶によっても、かぐや姫の月との対話とその悲しみ、そして月を見ても訳の分からない翁たちの状況と心情が語り出されているといえる。また几帳は翁たちからかぐや姫が見えるようにずらされて配置されており、かぐや姫と翁たちとを線で結ぶことができる。この線からかぐや姫の翁たちへの思いや翁たちのかぐや姫への思いを読み取ることも可能である。

次に本活動の略案を示す。

第1次(2時間)

- ・目標
- ①絵画テキストの語りと物語の語りとを比較することで、物語を読み深める。
- ②絵画テキストには絵画独自の語りがあることを知る。
 - ・使用絵画テキスト…龍谷大学図書館蔵『竹取物語』
 - ・配布物…絵画テキストのコピー、ワークシート
 - ・準備物…「e—黒板」(スクリーンに投射)

第1時

- 1 描かれた場面の確認。
- 2 本文との異同を見つけ、発表。
- 3 かぐや姫の様子を踏まえて絵画が語り出す物語を考える。

第2時

- 1 前時の活動3で考えた内容を発表。
- 2 絵師の改変について考え、発表。

第2次(1時間)

- ・目標
- ①絵画テキストにはそれぞれ[解釈—表現]過程があることを知る。
- ②絵画テキストを読む方法を知る。
 - ・使用絵画テキスト…龍谷大学図書館蔵『竹取物語』、国立国会図書館蔵『竹取物語』
 - ・配布物…絵画テキストのコピー、ワークシート

- ・準備物…「e—黒板」(スクリーンに投映)

第1時

- 1 龍谷本と国立国会本の異同を考え、発表。
- 2 国立国会本の語り出す物語を考え、龍谷本のそれとを比較し、違いを発表。

第3次(1時間)

- ・目標

①これまでの学習を踏まえて絵画テキストを読む。

②絵画テキストを読む学習について振り返る。

- ・使用絵画テキスト…國學院大學図書館本
- ・配布物…絵画テキストのコピー、ワークシート
- ・準備物…「e—黒板」(スクリーンに投映)

第1時

- 1 どここの場面を描いているかグループで話し合う。
- 2 1の内容を発表。
- 3 第一次から第三次までの学習を振り返りまとめを書く。

3. 授業の実際

第一次

描かれた場面を特定した後、本文と絵画テキストの描写の違いを見つけさせた。発表で出た意見は次の通り。

- ・天人が百人もいない。
- ・兵士がいない。
- ・不死の薬がない。
- ・天の王らしき人がいない。
- ・かぐや姫が天の羽衣を着ていない。
- ・翁が若い。
- ・翁が伏していない。

ただし、「かぐや姫が天の羽衣を着ていない。」という意見はすぐに出たクラスとそうでないクラスがあった。意見が出なかったクラスでは、「天人はなぜ百人描かれていないのだろう」、「兵士がいないのはなぜだろう」といった制作者のモチーフ選択の意図を考えさせる発問をし、また翁や姫、女房の目線を線で書いてかぐや姫を焦点化する構図であることを確認しながら、画面に描かれているかぐや姫に注目させて、かぐや姫の描き方と本文との違いを考えさせた。そして、かぐや姫の描写に注目し、本文の「物思ひなくなりけり」を描いていないことを確認した上で、絵画テキストの語り出す物語を考えさせた。以下、学習者の意見。

- ・まだ感情があるため、地上の人々との別れをなげき悲しんでいる。
- ・感情があるので、かぐや姫は人間の姿(感情がある者)

のまま帰っていった、という話になります。

- ・かぐや姫は翁や姫とまだ一緒にいたいけれど、天人によって無理矢理つれていかれるという物語になる。

こうした絵画テキストの語りをクラスで共有した後で、「龍谷大学図書館蔵『竹取物語』の制作者の改変をどう思いますか?」の答えを考えさせた。以下、学習者の意見。

賛成意見

- ①天の羽衣を着て今まで育ててくれた翁と姫、愛してくれた帝のことを忘れてしまうのは最後ぐらい別れをおしんでもいいと思うので、私は挿絵がいいと思いました。
- ②制作者はかぐや姫が翁や姫と別れることをかなしく思って、泣いていたり嘆いているシーンを書きたかったのかなと思う。ある意味、感情を失い、地上の人のことをなにも思わなくなるのはかなしい。
- ③物語の挿絵としてはふさわしくないと思います。けれどこの絵には制作者の思いが入っていると思います。かぐや姫が地上のことを覚えている、つまり少しは翁、姫、帝と天からつながっていて、思いあえるから救われた気持ちになるという思いだと思いました。
- ④私は改変が良いと思う。もとの『竹取物語』では、かぐや姫は天の羽衣を着て感情を失い、翁や姫と別れることにも何も感じていないが、改変では、かぐや姫も別れを悲しむ姿が描かれており、より「別れてしまうこと」の悲しさが伝わってくると思うから。

反対意見

- ⑤ぼくは改変はいけないと思います。理由は、かぐや姫はもう両親や帝のことを思うこともできなくなってしまったので、そのことについての文を書いたり、不死の薬を残したり、衣を形見として置いたりしました。思いがなくならなければ、そのようなこととは違った内容となるからです。
- ⑥良くないと思う。本来愛している人に忘れられるという切なさがこの場面にあると思う。しかし感情があつてはこの場面は成立しない。
- ⑦私は本文をそのまま絵にした方がいいと思います。なぜかというと、天の羽衣をきている、きていないが違うだけでも他の部分は変わってしまい、本文が成り立たなくなってしまうし、かぐや姫の感情がないからこそ、一番天に近い富士山で薬をもやしたんだと思うからです。
- ⑧本文では、かぐや姫が「感情をなくす」のが悲しいということが強調されていました。でも、絵の方では、「別れ」が悲しいというのが強く伝わってきます。本文は、月の人であるかぐや姫が地上で育てられ、だんだん感情をもっていくというように、「感情」につい

ての話だと私は思うので、絵を改変しない方がいいと思います。

⑨かぐや姫は羽衣をきたほうが良いと思う。なぜなら、かぐや姫がかんじょうを持ったままだと、翁とおうなのかなしみがへって作者のつたえたい考えが伝わらないきがする。

⑩筆者の伝えたかったことに反すると思う。筆者は月の世界と地上を対照的にえがき、本当に大切なものは何かを伝えようとしているのだと思う。だから、月の世界も感情があるという設定だと目的とずれてしまうから。

①に「別れをおしんでもいい」とあるように、かぐや姫が地上の者への思いを失い別れることに対する「かなしさ」(②の意見)から改変を肯定する意見が出された。またそうした思いを②、③のように「制作者の思い」として考え、制作者の意図という点で肯定する意見もあった。

一方で、⑤や⑦のように、物語をよく読み、物語の「内容」と齟齬をきたすという点で反対する意見があった。さらに、物語の「内容」という段階から一歩踏み込んで、⑧のように『竹取物語』のひらく問題領域や⑨、⑩のように『竹取物語』の作者の「考え」、「伝えたかったこと」が矮小化されてしまうという理由で反対する意見もあった。

授業では、そうした意見を総覧した。また、④と⑥のような意見を手掛かりに、物語の描く「悲しみ」と龍谷本の語り出す「悲しみ」の違いを問題とし、それぞれの「悲しみ」がどのようなものか考えた上で、改変についてどう考えるかと再度問いかけて授業を終えた。

以上が、第一次の授業の実際である。第一次での電子黒板の使用場面とその効果について次にまとめておく。

電子黒板の使用場面

- 1 画面に描かれているものの確認。登場人物など。
- 2 かぐや姫の拡大。
- 3 構図の説明。「かぐや姫が天の羽衣を着ていない。」という意見がでなかったクラスでは、翁と姫がかぐや姫を見上げかぐや姫が焦点化される構図であることを説明した。

効果

- 1 画面に描かれているものの説明のしやすさ。特に、女房などの古典的知識がない学習者には説明がしやすかった。
- 2 かぐや姫を拡大することで、かぐや姫が「天の羽衣」を着ていないことが確認できた。
- 3 翁や姫の視線を線で表して視覚化し、口頭では説明が難しい構図について説明ができた。

第二次

国立国会本の描く場面を確認した上で、龍谷本との異同を考えさせた。共通点と相違点は次の通り。

共通点

- ・天人が六人。
- ・かぐや姫が天の羽衣を着ていない。
- ・屋根がない。
- ・翁、姫、中将がいる。
- ・かぐや姫が雲に乗っている。
- ・かぐや姫の視線

相違点

- ・兵士がいる。
- ・女房がいない。
- ・天人に一人冠をかぶっている人がいる。／王らしき人がいる。
- ・湖がある。
- ・車の様子が違う。
- ・翁と姫の服装が違う。
- ・翁と姫が泣き伏している。
- ・かぐや姫との距離が違う。

どのクラスも前時の活動でかぐや姫に注目したため、かぐや姫の様子については意見が出た。一方、相違点としては、車の装飾や翁、姫の服装や見かけ上の年齢、庭の様子など細かなものまで出されたが、「かぐや姫との距離が違う。」といった意見は出たものの、具体的な配置の違いについては発表では出されなかった。学習者にとって「配置」に注目し絵画テキストを読むということは意識されていないようであった。

授業では、天人を拡大し、「何を持っているのか」、「何をしているのだろうか」と発問し、物語を学習者に確認させた。また、龍谷本は頭中将が翁と姫の横にいること、国立国会本は、かぐや姫の前に頭中将がおり、その背後に翁と姫がいることを確認した。

以上の活動をふまえて、龍谷本の語り出す物語と国立国会本の語り出す物語との違いを考えさせた。以下、学習者の意見。

- ①自分が感じた事だけれど国立国会図書館の方が翁と姫がかなしそうだと思います。翁と姫の泣き伏せている感じがより伝わってくるからです。
- ②国立国会図書館本の方は兵士がいるので「かぐや姫に月に行ってほしくない」という気持ちがよく伝わってきました。
- ③国立国会は帝に薬などを渡そうとしている場面で龍谷大学は翁、姫との別れの場面を表している。
- ④龍谷大学図書館のものよりも国立国会図書館のものの方が、中將とかぐや姫との距離が近く侍(役人)もいることから武力でどうすることもできなかった中將のく

やさしさが中心に表れている。もう一方は翁・姫の悲しみを中心に表している。

⑤龍谷大学図書館本では、姫、翁とかぐや姫との別れをメインに表しているけれど、国立国会図書館本では、かぐや姫の正面に帝の家来の中将がいることや役人が描かれていることなどから、帝とかぐや姫との別れをメインに表していると思います。

①のように翁や姫の姿態に注目し語りを考える意見、②のように女房ではなく、兵士が描かれているというモチーフの有無から語りを考える意見、③のように天人の様子から語りを考える意見が出された。また、配置に注目し語りを考えた意見では、④や⑤のようなものがあった。

以上が、第二次の授業の実際である。第二次での電子黒板の使用場面とその効果について次にまとめておく。

電子黒板の使用場面

- 1 龍谷本と国立国会本とを同一画面上に並べ、異同を確認。
- 2 天人の拡大。
- 3 頭中将、翁や姫の配置の違いを説明。

効果

- 1 同一画面上に両図があることで比較しやすい。
- 2 天人を拡大することで、天人が何をしているのかを考えさせることができた。
- 3 頭中将、翁と姫の配置を視覚的に認識させながら説明できた。

第三次

絵画テキストを読む方法がどれだけ身についているかをみるため、絵画テキストの語りの内容には一切ふれずに、学習者自身に絵画テキストを読ませた。ただし、難しさを軽減するため、グループ形式で話し合いをしながら読み解かせた。また、はじめに人物の特定をさせ、発表させてから、「誰が何をしている場面か」を考えさせた。

発表させると二つの意見が挙がった。一つは、①のように、かぐや姫が月を見て泣き、翁たちが心配する場面とする意見。もう一つは、②のように、月からくる天人を待ち受けている場面とする意見。

①かぐや姫が月に帰らなければならない日が近づき、泣いていて、翁や姫が心配している場面だと思う。(絵では、空に月があり、みんなが外にある月の方を見ており、かぐや姫は悲しんでいる様子だから。)

②月から天人がくるのを皆で待っている場面。根拠：みんな月を見ているから。ここに中将がないのは、おそらく家の玄関で天人を迎え撃つ準備をしているから

だ

場面を特定した理由を明記するように作業させたが、それを見ると、学習者は、1空に月がある点、2かぐや姫や翁たちが月を見ている点、3かぐや姫だけが泣いている様子である点、以上の三点に着目しながら場面を特定したようである。

授業では、「どちらの場面だろうか」と問いかけ、根拠の3や次に引用する③、④のような意見を新たに発表させて、場面を特定していった。

③七月十五日のこと。かぐや姫は月を見て泣いている。翁や姫は何か悩みがあるのだろうと推測するが、原因が分からないでいる状態。翁たちがかぐや姫に尋ねている様子もないことから、一番七月十五日の様子がふさわしいかなと思う。

④かぐや姫が月を見て泣いている場面。かぐや姫だけが月を見て泣いているからです。また戸口を閉めていないことと、将軍がいないことから天人を待っている場面ではないことが分かります。

上述した根拠の1から3までを分析すると、学習者は1モチーフの有無、2人物の目線、3人物の姿態といった点から絵画テキストの語りを読み解いていったことが分かる。こうした読み方を、これまでの学習で獲得したようだ。

一方で、霞の生み出す線や線の断絶に着目する意見はでなかった。そこで、授業者が説明しどのような意味がありそうかを考えさせた。ワークシートに書かれていた意見は次の通り。

①絵を見ると、月はかぐや姫がいる位置からは見えようになっており、翁らの位置ではかすみなどであまり見えないと思う。それでも翁らが月のある方向を見ているのは、その方向に何があるのかははっきりとはわからないが、かぐや姫がその方向を気にして悲しんでいるため、そこにかぐや姫の悲しみの理由があるのではないかと思い、月のある方向を見ているのだと思う。

②かぐや姫だけに月が見えるようにしてあるのは、かぐや姫がこの世の人ではなく、月の人であることをさりげなくアピールしているのだと思う。

③かぐや姫の所だけがかすみ無く月が見え、かぐや姫だけを泣いているように描くことによって、かぐや姫が月に帰らないといけないということを一人でかかえていることを描いているよう思う。

学習者の意見を見ると、國學院本の語りを読み解くことはできたようだ。このようにして新たに絵画テキストを読む方法を与えていくことができるだろう。

以上が、第三次の授業の実際である。第三次での電子黒板の使用場面とその効果について次にまとめておく。

電子黒板の使用場面

- 1 学習者が電子黒板に映し出された絵画テキストにペンで書き込みをしながらどの場面かを発表。
- 2 意見の検討。
- 3 霞が生み出す構図を説明。

効果

- 1 話し合った意見を発表する時に、電子黒板を使って説明させた。ペンを使って書き込みし説明することができた。意見を聞いている学習者も注目するし、説明する側も説明がしやすかったように見えた。
- 2 出された意見を検討する際に、戸口がしまっていない点や兵士がいない点などを画面を使って確認できた。
- 3 かぐや姫の視線と翁たちの視線を線で視覚化し、霞によって生み出される線や線の断絶をわかりやすく説明できた。

4. おわりに

学習のまとめには次のような感想があった。

- ①かぐや姫が月に帰る場面が、挿絵を何枚か見たことで、もっと深く理解できた気がする。
- ②絵はかざりのようなものではなく、絵も文と同じように、メッセージがこめられているのかな、と思う。
「竹取物語絵巻」を読み解くことで、物語を読み深めたり(①の感想)、表象について考えたり(②の感想)することができたようだ。また、次の③、④の感想にあるように絵画テキストを読み解くこと自体、学習者にとって楽しい、おもしろい活動であったようだ。
- ③絵から作者の意図を読み解くというのは、かいてある人物、配置、背景などいろいろなことを注意して想像していかなければならないので大変な作業だけど、楽しかった。様々な絵を読んでいくうちに、絵だからこそ表現できる表情、配置などが絵の特徴であり、よさだと思った。
- ④國學院の絵は「霞」や月の位置などを工夫して、かぐや姫の心情等を表していて、工夫をみつけるのがおもしろかったです。

このように絵画テキストを読むことで古典学習を拡充させることができる。しかし、そのためには絵画テキストを十分に分析できるように提示する必要がある。そうした提示を可能にする方法の一つとして電子黒板がある。本稿で報告してきたように、電子黒板を使うことで画面を見ながら一つ一つの図像を説明したり、図像を拡大したり、口頭では難しい構図の説明を視覚的にすることができる。また、学習者に絵解きをさせることもでき

る。電子黒板を活用することで、絵画テキストを読む活動を充実させていくことができるだろう。

また、まとめの「絵を読む方法について、知ったこと分かったことを書こう」という項目には、次のような意見があった。

・登場人物の様子(泣いている、悲しんでいる)や配置、背景(雲がかかっている、月が遠くに小さく見えている)などに注目したら読めるのではないかなと思いました。

視覚的な認識を十分にさせることでおそらく絵画テキストを読む方法を与えることができる。こうした効果も電子黒板にはあるだろう。今後も電子黒板を活用して、絵画テキストを読む活動を工夫し充実させていきたい。

【注】

- *1 拙稿「教材としての絵巻(1)―古典学習の拡充に向けて―」(『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第52巻, 中国四国教育学会, 2006年3月, 456～461頁), 「教材としての絵巻(2)―古典学習の拡充に向けて―」(『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第54巻, 中国四国教育学会, 2008年3月, 456～470頁), 「教材としての絵巻(3)―古典学習の拡充に向けて―」(『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第56巻, 中国四国教育学会, 2010年3月, 43～48頁), 「教材としての絵巻(4)―古典学習の拡充に向けて―」(『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第57巻, 中国四国教育学会, 2012年3月, 646～651頁)。
- *2 立石和弘「源氏物語絵巻の境界表象」(源氏物語をいま読み解く①『描かれた源氏物語』, 翰林書房, 2006)
- *3 三田村雅子『草木のなびき, 心の揺らぎ 源氏物語絵巻を読み直す』(フェリス女学院大学, 2006)
- *4 株式会社内田洋行HP…
(<http://school.uchida.co.jp/index.cfm/19,1953,57,214,html>)
- *5 各HPアドレスは以下の通り。
 - ・龍谷本…「龍谷大学電子図書館 貴重書画像データベース」(<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html>)
 - ・国立国会本…「国立国会図書館デジタル化資料」(<http://dl.ndl.go.jp/>)
 - ・國學院本…「國學院大學図書館 デジタルライブラリー」(<http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib.html>)
- *6 上原作和, 安藤徹, 外山敦子『『竹取物語絵巻』場面・構図比較一覧表』(198～199頁。上原作和, 安藤徹, 外山敦子『かぐや姫と絵巻の世界―一冊で読む竹取物語 訳注付』, 武蔵野書院, 2012)